

---

# ぼくのお姉ちゃん

澤田喬平

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ぼくのお姉ちゃん

### 【Nコード】

N0624Y

### 【作者名】

澤田喬平

### 【あらすじ】

姉の星奈とその弟の悠斗はとても仲良しで、いつも元気に遊んでいる。ある日の夜、テレビで幽霊の番組を見て怖くなった星奈は、悠斗のベットと一緒に寝ようとする。するとその部屋に、なんと本物の幽霊が現れる。そして一緒に遊ぼうと誘われてしまう！

## 第一章 川原にて

「悠斗、早くこっちまで来なさい。今日こそは一人で川をわたるって約束したでしょ」

「でもおねえちゃん、この石たかくてこわいよ」

ある日の昼過ぎ、二人の小学生らしき男女が、川に一列に置かれた四角いブロックの上で言い合っている。女の子は四年生くらいで、髪を二つに束ね、赤色のスカートをはいている。男の子はまだ一年生らしく、Ｔシャツに短パン姿だ。

お姉ちゃんと呼ばれた女の子は、川の真ん中あたりのブロックに立ってこしに手を当て、あきれたような顔をしている。

一方悠斗と言われた男の子は、川岸に一番近いブロックを不安そうに見ている。この状態が、カップラーメンが一個できそうなほど続いていた。

「石の上に立たないと、何も始まらないでしょ。さっさと上がりな」  
お姉ちゃんの声に、悠斗はしぶしぶ目の前のブロックによじ登った。このブロックは、悠斗のこしくらいの高さまであり、登り切って立ち上がった悠斗の足が、まるでケータイのバイブのようにふるえている。

「むりだよ、ぼくこんなのわたれないよ」

悠斗は泣きべそをかきながら、お姉ちゃんに助けを求めた。少しして、本当に泣きだしてしまった。

「……まったくしょうがないわね」

お姉ちゃんはため息をつくと、スカートがめくれるのも気にせず、身軽にブロックからブロックへジャンプしながら、悠斗のいるところへ向かった。

カエルよりもきれいにとぶお姉ちゃんは、かれいに悠斗のいるブロックに着地した。両腕で目をゴシゴシとふいていた悠斗は、突然目の前に現れたお姉ちゃんに、腕を顔から離してびっくりした。

お姉ちゃんは、そんな悠斗のふるえている手をとった。

「いい？ 悠斗、一緒にわたるのは今日だけだからね」

お姉ちゃんは悠斗の目を見ながらそう言つと、さっき自分がいたほうへ向いた。

「悠斗、あたしが合図したら一緒にとぶのよ、わかった？」

悠斗はうん、と小さい声で答えると、お姉ちゃんのとなりに立った。

「よし行くわよ。一、二の三！」

合図とともに、二人は同じタイミングでジャンプした。お姉ちゃんはしっかりと両足で着地したが、悠斗はジャンプ力が足りず、ブロックに一歩足が届かない。

悠斗は、ニュートンが万有引力の法則を発見するきっかけとなつたリンゴのように、まっすぐ落ちていく。手をつないでいたお姉ちゃんも、さすがに悠斗を支える力はないようで、一緒に川へ背中から落つこちた。

落ちたとたんに二人は、川底に背中を打ちつけた。お姉ちゃんは急いで立ち上がった。お姉ちゃんのひざ辺りに水面が広がっている。お姉ちゃんは力を込め、つないだままの悠斗の手をおもいつき引き寄せた。すると、かみの毛がぬれて頭が小さくなっている悠斗が、顔を出す。

あまりの物事の移り変わりに、何が起きたか分からずキョトンとしている悠斗を見て、お姉ちゃんは腹をかかえて笑いだした。

「あははは！ 悠斗、あんたの頭まるでグリーンピース見たいに小さい！ おもしろい」

なかなか笑いが止まらないお姉ちゃんを見て、悠斗は涙が引つ込んだ。

「もう！ わらわないでよ。おぼれたらどうするのさ」

悠斗が、ほつぺたをぶくつとふくらませた。

「大丈夫よ。そんなに深くないんだから。それより、早く向こうへ行きましょ」

そう言ってお姉ちゃんは悠斗を立たせ、そのまま手をつなぎながら川の中を進んだ。

少しして向こう岸へたどりつくと、突然服が重くなった。「やだ、パンツもびしょびしょになっちゃった」

お姉ちゃんが、スカートの中にあいている手を入れながら当たり前のことを言っていると、悠斗の『あっ』という声が聞こえた。

お姉ちゃんがふり返ると、悠斗は下を向いて、口をポカーンと開けている。

「どうしたの、悠斗？」

「ズボンが……」

お姉ちゃんが悠斗の下半身へ視線を移すと、悠斗がはいっていたはずのズボンが、足首のあたりまで脱げていた。そして中にはいたいた白いパンツがあらわになり、戦隊もののキャラのプリントがまぶしく光っている。

お姉ちゃんは、プツとふきだした。

「あれ？　悠斗なんでズボン脱げてるの？　ゴムがゆるくなつてたわけ？」

「そんなの知らないよ。かつてにぬげたんだもん」

悠斗は口をとがらせると、ズボンをはこうと手を伸ばす。

その時、お姉ちゃんがその手をガシッとつかんだ。

「いいわよはかなくて。そのまま脱いじゃって。この暑さだったら、干しておいたらすぐ乾くでしょ」

悠斗はズリ落ちているズボンを、くつを脱いで足から外し、そばに置く。

ズボンを脱いでいる悠斗を見て、お姉ちゃんはニヤツと笑った。

「悠斗、どうせならぜんぶ脱いじやいな。そのままだと風邪ひくわよ」

お姉ちゃんの言葉を聞いて、悠斗は顔をひきつらせた。

「え、でも……。だれかにみられちゃうよ」

「大丈夫よ。こんな川に来る人なんて、めったにいないから。裸で

いたほうが、涼しくて気持ちいいしね」

一年生ながら、悠斗は人前で裸になることが恥ずかしいのは、ちゃんと分かっている。いつまでも服を脱ごうとしない悠斗に、お姉ちゃんはがまんできなくなった。

次の瞬間、お姉ちゃんはすばやい動きで悠斗のＴシャツの裾を持ち、あつという間に脱がした。そしてそれをポイッと投げる。

悠斗に逃げるヒマを与えず、お姉ちゃんはそのまま悠斗の体を両手であお向けにおし倒し、パンツに手をかけ、力をこめて一気に足から引っこ抜いた。男の子の象徴が姿を現す。それを見て、お姉ちゃんは少しドキツとした。

悠斗はあわてて立ち上がり、近くに落ちていたズボンで股をおさえる。

「なにをするのさ！ パンツかえしてよ」

悠斗が顔を赤らめながら叫ぶが、お姉ちゃんはそれには答えず、今度は自分のスカートに手をかけた。

悠斗が口をあぐりと開けて見守る中、お姉ちゃんはスカートを外し、Ｔシャツを脱ぎ、そして下着もすべて取っ払った。今のお姉ちゃんは、生まれた時の姿そのものだ。

「これで公平でしょ？」

お姉ちゃんは、ペロツと舌を出した。そんなお姉ちゃんを見て悠斗は、

「へんなおねえちゃん。じぶんでふくをぬいじゃうなんて」

と、両手で口をおさえながら笑った。

お姉ちゃんは、辺りに散らかっている服をかき集め、川原の石の上に横一列に並べ始め、最後にくつしたを脱いで横に置いた。それにつられて、悠斗もくつしたを苦労しながら脱ぎ、お姉ちゃんのくつしたの横に並べた。股をおさえていたズボンも、一緒に置く。

「さあ悠斗！ 何して遊ぶ？」

お姉ちゃんが、悠斗を見て言った。

「石投げ！」

悠斗が、投げるまねをしながら元気よく答えた。

「またやるの？ あんた昨日は一度もはねなかったじゃない」

「きのうはきのう！ きょうはぜったいうまくいくよ」

「へえ、それは楽しみね」

お姉ちゃんはククつと笑うと、先に石を手に取り、川岸へ立った。そして、野球選手もびつくりするようなきれいなフォームで、川の真ん中めがけて石を投げる。石は三回はねてポチャンと落ちた。

「どう？ あんたもできる？」

お姉ちゃんがこしに手を当て、誇らしげに言った。

「そんなのかたんさ！ みててよ」

悠斗はそう言つと、お姉ちゃんをまねて勢いよく腕を振つた。むなしいことに石はまったくはねることなく、近くにポチャンとしずんでいった。

「あははは！ 一回もはねなかったじゃない。っていうか『ポチャン』てなに？ 石が大きすぎなのよ」

あまりのおかしさに、お姉ちゃんはおなかが痛くなった。

「ふん、これかられんしゅうすれば、十かいくらいはねるようになるもんね！」

悠斗は口をへの字に結ぶと、少し離れて黙々と石を投げ始めた。だが、いくら投げてもお姉ちゃんのようにはねない。

そのうち飽きてしまい、悠斗は川に飛びこんで泳ぎ始めた。お姉ちゃんと同じように、泳ぎには自信がある。

お姉ちゃんも川に入ってきた。そして二人はしばらくの間、水をかけあつたり競争したりして楽しんだ。

川原の近くのしげみで虫を追いかけていると、となりを走っているお姉ちゃんが、そろそろ帰ろう、と悠斗に言った。

すでに日が傾いていて、オレンジ色の光が川を照らしている。

川原へもどりお姉ちゃんは服を手に取った。昼間の暑さですつか

り乾いている。お姉ちゃんは、スカートを自分の鼻に近付け、においをかいだ。

「ああ、やっぱりいやなおいがついちゃってる」

さすがのお日さまも、この生臭いにおいはとれなかったようだ。

仕方なく二人はその服を着ると、あのブロックをわたって元来た道を歩いて行った。

帰り道、二人が手をつないで歩いていると、悠斗がぐずんと泣き始めた。

「どうしたの？」

お姉ちゃんが悠斗の顔をのぞきこむと、

「…あのね、川におちたときすぐくこわかったの……」

悠斗がしゃくりあげながら言った。どうやら今になって恐怖がよみがえってきたらしい。

「それくらいで泣くな。男の子でしょ」

お姉ちゃんはそう言いながら悠斗を引き寄せ、頭をなでる。

少しするとお姉ちゃんは、悠斗のほっぺたを流れている涙を右手の人差指でとり、そのままなめた。

「あ、涙って本当にしょっぱいんだ」

感心してうんうんとうなずいたお姉ちゃんは、手を離し、悠斗の前にしゃがんだ。

「ほら、あたしにのっかって」

お姉ちゃんが、ふり向きもせず促す。悠斗はすなおに、お姉ちゃんの背中に体をくっつけた。お姉ちゃんの背中には、あったかくてとても気持ちいい。

お姉ちゃんは静かに立ち上がると、家へゆつくりと歩き出す。

悠斗は、すぐに平和な寝息をたてて眠りはじめた。





## 第二章 一家団らん

「おそいわねえ、あの子たちどこまで遊びに行ってるのかしら」

農作業から帰ってきたお姉ちゃんと悠斗のママが、玄関のドアの近くに昼間着ていた上着をかけながらつぶやいた。

ママはリビングへもどり、壁時計を見上げた。六時を少し回っている。

「六時半を過ぎたら、パパとその辺を探しに行こうかな」

ママは台所へ向かいながら、不安そうにそう言った。

パパは今、畑でとれた野菜をトラクターで、家の隣にある倉庫に詰め込んでいる。

ママは腕をまくってエプロンを首にかけ、水道で手を洗う。そしてまな板や包丁を準備し、冷蔵庫からジャガイモやニンジン、玉ねぎなどを取り出した。

今日の夕ご飯はカレーだ。今日は少し疲れているので、手のこんだ料理は作る気にはなれない。おとといの金曜日もカレーだったよ。うな気がするが、うちの家族はみな大のカレー好きなので、だれも文句は言わないだろう。

野菜をすべて洗って包丁で皮をむき終わると、ママはジャガイモを手にとった。ママはふふつと笑う。

「子どもの頃よく正治さんが、『おれはジャガイモマンだぞ』とか言っただけでいたっけ。それでわたしは『ニンジンちゃん』だったわね」

ママは、幼いころ今の旦那さんと『正義のヒーローごっこ』をして、野山を走り回っていたことを思い出した。家が近所だったので、毎日一緒に遊んでいた……。

ママは、そこで我に返った。

「そっだ、さっさと作ってしまわないと……」

ママはジャガイモをまな板の上に置くと、それを少し大きめに切

つていく。パパが、カレーの具は大きめにしてくれ、と言って聞かないのだ。パパによると、食べ応えのあるほうがいい、ということらしい。

カレールーを入れて煮込み始めたころ、ママはもう一度時計を見た。後五分で六時半になる。

いつも夕ご飯は六時半に食べ始めているから、もうすぐ『おなかすいた』と言って子どもたちが帰って来てもいいころなのだが、玄関の外につないでいる犬がうれしそうに吠える声は、まだ聞こえてこない。

五、六分たって、カレーの香ばしいかがりがリビングのすみずみまで広がった頃、表にいるウルフィが『キャン、キャン』と吠えだした。ママはあわてて火を止め、玄関へと早足で向かう。

ママが玄関のスリッパをはく前にドアが少し開き、ツインテールの髪をした女の子が、辺りをうかがうように顔をヒョコつと出した。「コラ星奈！　いつまで外で遊んでるのよ。夕ご飯の前には帰ってきなさいっていつも言ってるでしょ」

ママが、こしに手を当てて怒鳴った。星奈と呼ばれたお姉ちゃん、は、びつくりしたように一瞬顔をこわばらせた。だが、すぐに口をとがらせる。

「だって、外で遊んでたら時間なんてわからないじゃん。だから前から腕時計買ってよって言ってるのに」

「何言ってるの。一ヶ月くらい前に、川でなくしたばかりじゃないの。そんなあなたに時計は持たせられません」

「それじゃ、帰る時間はわからないのは、ママのせいだよ」

星奈がニヤツと笑う。

「そうね。そしたら今度悠斗に時計を持たせるから、そうすれば時間ができるわよね」

ママが見返したような顔をする。

星奈は、不満そうにほつぺたをふくらませた。

「星奈、早く中へ入りなさい。悠斗が入ってこれないでしょ」

ママがドアを開け、星奈の腕を引っ張った。悠斗が、目をこすりながら立っている。悠斗を中に入れると、悠斗のＴシャツが薄く汚れているのに気がついた。

ママは星奈の着ている服も見た。コケや泥があちこちについている。

「あんたたち、一体何して遊んでたの!? いつも汚してきて……。服を汚さない遊びはできないわけ? 洗濯するのはママなのよ」

ママがあきれたように言う。星奈が昼間あったことを話そうとすると、

「その話は後で聞くわ。とりあえずあんたたち、はやくお風呂に入って泥を落とさない」

そう言っただけでママは、泥がこびりついている星奈の髪をなでた。

ママは、くつを脱いだ二人をまっすぐ脱衣場へ連れて行った。そして大きなバケツを二つ、洗濯機のそばに置いた。

「脱いだ服は、この中に入れておいて。着替えは後で持ってくるから。しっかりと体を洗ってから湯船に入るのよ」

二人は、はいと答えた。ママは二人の着替えをとりに出ていく。星奈は服を脱いでダンゴのようにまとめ、バケツに放り込んだ。

悠斗は、ていねいに服を一枚ずつ入れていく。

「おそい! さっさと脱げ!」

悠斗がパンツ一丁になった時、星奈が悠斗のパンツを勢いよくおろした。

「もう、やめてよお姉ちゃん!」

悠斗は文句を言うが、星奈は笑いながらドアを開け、お風呂場へ入っていく。悠斗もパンツを脱いでバケツに入れ、ペタペタと歩きながら中に入り、ドアを閉めた。シャワーの音と二人のはしゃぐ声が、すぐに辺りへ響いてきた。

「あんたたち、パパが帰ってきたらごはんにするからね。早くお風呂上がるのよ」

着替えを持って戻ってきたママが、一応ドア越しに声をかけるが、

おそらく聞こえていないだろう。ママは、はあつとため息をついた。ママは、お風呂のドアの向いがある棚に手を伸ばし、洗剤を手にとった。そしてそれを、子どもたちが脱いだ服の汚れている部分にかけていく。こうしておけば、洗濯機で洗ったときに汚れが落ちやすくなる。

ママは洗剤を元の棚へ戻すと、夕ご飯の準備をするために台所へもどっていく。

カレーのなべに火をかけたとき、玄関のドアが開く音がした。どうやらパパが帰ってきたようだ。

「あなたお疲れさま」

ママはその場でふり返って声をかけた。

「おう」

パパが短く返事をした。いつもより元気がないような気がする。

パパは、作業着姿のままソファにどかと座った。そしてリモコンをつかんでテレビをつけ、NHKにチャンネルを合わせた。全国の天気予報が映し出されている。

「ねえあなた、今年の野菜の調子はどう？」

ママが、カレーをゆっくりと混ぜながら尋ねた。

「ああ、あまり良くないな。六月に大雨が降っただろ？ あの時野菜が水を吸いすぎて腐ったもんだから、だいぶ収穫量は落ちちゃった。まあ、ビニールハウスの果物はどうにかなりそうだ。四月に補強しておいて正解だったぜ」

パパは、テレビを見ながら答えた。

「異常気象なのかしら……？」

「そうだろうな。地球温暖化ってやつだろう」

パパは、はき捨てるように言った。

お風呂場からは、相変わらず子どもたちのたのしそうな声が聞こえてくる。

「あれ、あいつらもう風呂に入ってるのか？」

パパがお風呂場のほうを見ながら驚いたように言った。

「そうよ。あの二人また体中泥だらけにして帰ってきたのよ。洗濯する身にもなつてほしいわ」

ママが不満を口にする、パパは大声で笑い出した。

「どうしたの？ 何がそんなにおかしいのよ」

ママは不思議そうに、パパのほうをふり向いた。

「いや、おれも昔はあいつらみたいによく遊んでたのを思い出してな。服を汚して、おふくろによくしりをぶつたたかれたもんだ」

「そうね。たしかにずっと外を走り回っていたわ。わたしを無理やり引つ張っていった」

「無理やりじゃないだろ。お前もうれしそうにしてたじゃないか」

「ええ？ そうだったかしら」

ママはあわてたようにカレーのほうに向きなおり、再び混ぜ始めた。

十分くらいたったころ、ドタドタという音とともに星奈がすっばだかで走ってきた。片手には、悠斗のパンツが握られている。

「パンツかえしてよ、お姉ちゃん！」

と言つて悠斗も走ってきた。お姉ちゃんとちがい、ちゃんとタオルを体に巻いている。

「あははは！ ほしかったらあたしを捕まえてみなさい！」

星奈は悠斗の手を巧みにかわしながら、リビングをかけ回っている。

「こら星奈！ いじわるしちやダメでしょ。ちゃんと服を着なさい」  
ママはカレーを入れるお皿を持ちながら注意した。だが、星奈が立ち止まる様子はない。

その時パパがソファからこしを上げ、そばを通り過ぎようとした星奈の前に立ちはだかった。星奈がパパのおなかに激突する。そしてその後ろを走ってきた悠斗も、パパの太い腕の中にすっぽりおさまった。

「おら、パパがお前たちを捕まえたぞ」

パパはニヤニヤしながら、二人の肩をガシっとつかんだ。

「やったー、やっとお姉ちゃんをつかまえた！」

悠斗が、パンツを持っているほうの星奈の腕を持った。

「別にあんたに捕まったわけじゃないもん。この勝負はあたしの勝ちよ」

星奈は口をとがらせながら、悠斗の手をふりはらった。またケンを始めようとにらみあう二人を、

「お前ら、腹減ったろ？ 早く服を着てカレーを食べような」

とパパがなだめながら、脱衣所へ連れていった。

子どもたちがリビングへ来てすぐに、食事の時間になった。昼間暴れ回ってすっかりおなががすいていた子どもたちは、もっと落ち着いて食べなさい、というママの声を無視し、子どもサイズのお皿に入れてあるカレーを、十分弱ですべてたいらげてしまった。

その後星奈は、上品にカレーを食べているママに向かって、昼間起きたことをしゃべりはじめた。

川に落ちた後、夕方までずっと裸で遊んでいたことを話した時、ママはのどを詰まらせてむせた。そして顔を真っ赤にして星奈を十分くらいこっぴどくしかった。

星奈はママのお説教には慣れているので、ときどき相づちを打っただけだった。

食事が終わった後、ママは後片付けを始め、パパと子どもたちはテレビを見ていた。画面には、小学校のクラスの集合写真が映し出されている。生徒は全員、帽子と体操服姿だ。

『写真の左上にご注目ください』というナレーターの声と同時に、画面がゆっくりと左上にズームアップされていく。

すると、画面から小さく悲鳴が聞こえた。パパと悠斗は興味深そうに目を凝らしながら見る。星奈は両手で顔をかくし、カタカタ震

える指を少し開けて、画面をみつめている。

その時、一番後ろに立っている生徒の肩の横に、ぼんやりと長い髪女性の顔があるのが見えた。

パパと悠斗は『おお!』と驚いている。だが悠斗の横にすわっている星奈は、

「キヤー?」

とねこの声のような悲鳴を上げ、思わず立ち上がる。だが、不運にも床がフローリングであるため、星奈は足を滑らせ、思いつきり床におしりを打ちつけた。悠斗がプツとふきだす。

「お姉ちゃん、あんなのがこわいの? ぼくはぜんぜんへいきなの  
に」

「う、うるさい! トイレに行こうとして立ったら転んだだけよ」  
「ふうん、でもお姉ちゃん、大きいこえだしてたよね。あれってやつぱりこわかったんでしょ?」

悠斗がニヤニヤしながら星奈を見下ろす。

「う、ち、ちがうわよ! パ、パパ! は、はやくチャンネル変えてよ!」

星奈は首まで真っ赤にして、テーブルに置いてあるリモコンに手を伸ばす。しかしパパが、それをすばやく手に取った。

「星奈! いつもお前の好きなテレビを見てるんだから、たまにはパパが見たい番組を入れてもいいだろうが。そんなに見たくないなら自分の部屋に行けばいいんじゃないか?」

パパは、星奈を諭すように言った。悠斗がそうだ、そうだ! とヤジを入れる。すると、星奈はブンブンと首を横にふった。

「いやよ! だってそうしたら、そうしたら」

星奈は、悠斗が見下しているような目で自分を見ているのに気づき、言葉を詰まらせた。

次の瞬間、何を言ったらいいのかわからなくなった星奈は、台所でコメをといでいるママのもとへ走って行った。

「どうしたの、星奈?」



後ろからこしに抱きついてきた星奈に顔を向け、ママが尋ねる。

「幽霊が、幽霊が、とても怖かったの」

星奈は、ママのエプロンに顔をうずめた。ママは体を星奈のほうへ向け、胸と腕でやさしく包む。

「大丈夫よ、幽霊なんてうそっぱちなんだから、気にしないでいいわよ」

「本当？」

星奈が顔を上げた。

「当たり前じゃない。あんな非科学的なもの、しんじなくていいのよ」

ママがにつこりと笑った。

「おいおい、幽霊はうそっぱちじゃないぞ」

パパが、ママと星奈のほうにふり向いて文句を言った。パパはいわゆる“オカルトマニア”で、幽霊やユーフォーの存在を本気で信じている。最近、悠斗もパパの影響を受けはじめ、オカルト系のテレビは必ずチェックしている。

「あのねパパ、今星奈をなぐさめてるんだから、余計なこと言わないで」

ママが、パパを家に忍びこんできた泥棒を見るような目でにらみつけた。

「そ、そうか。すまん」

パパはあわててテレビに視線を戻す。

星奈は、その番組が終わるまでずっとママにくっつき続け、一緒に二回目のお風呂にも入った。



### 第三章 子どもたち、幽霊と出会う

都会と違い、この辺は夜になると車の走る音はまったく聞こえなくなり、恐ろしいほど静かになる。聞こえてくる音と言えば、飼い犬がときどき吠える声と、風が窓ガラスをカタカタと鳴らす音くらいだ。

国道沿いに家を構えている神崎家は農家であるため、朝がとても早い。九時半くらいなのに家に明かりが一つも付いていないのはそのためである。

その家の部屋の一つ、六畳半の女の子部屋の窓際にあるベッドの中で、星奈は体を丸めて震えていた。

星奈は先ほどテレビで、幽霊の特集をした番組を見てしまい、太陽にも負けないいつもの元気な笑顔が別人のようにおびえきっている。

星奈は別に、気が弱い子ではない。むしろ男の子と平気でケンカをするほど活発なのだが、幽霊だけは大きな字が三つ付くほどきらいだ。

幼稚園の頃、遊園地のお化け屋敷でとても怖い思いをしたのが、いまだトラウマになっている。

星奈は、体にかけてあるタオルケットからぱはっと顔を出した。顔が風呂上がりのようにほてっている。

今夜は一人では寝られない。星奈はそう思った。

「ママと一緒に寝ようかな」

星奈は小さくつぶやくが、すぐにそれは無理だと気付いた。ママはパパとダブルベットで寝ていて、とても星奈が入れるスペースはない。

残る選択肢は一つしかない。星奈はがばっとタオルケットを手で払いのけた。

枕を持って足をそろっと床に置き立ち上がると、正面の棚の上に、

大きなクマのぬいぐるみが置いてあるのが目に入った。いつものかわいいうマさんが、暗闇の中で本物と入れ替わったように怖く見える。

星奈はあわてて視線をそらすと、枕を胸で抱きながら、ドタドタと走って自分の部屋を出た。

神崎家は夏の間、風通しを良くするため、すべての部屋のドアを開けっ放しにしている。

星奈は、向かい側にある悠斗の部屋にそのままのスピードで入り、ベットで寝ている悠斗の体にかけてあるタオルケットをめくって、その中にもぐった。するとすぐに、何かしらの違和感を感じ、悠斗が目をあけた。

「ん……？ うわあ！ お、お姉ちゃん？ なんでここにいるの？」  
悠斗がおどろいたように、はね起きた。お姉ちゃんは自分の枕を、悠斗の枕のとなりに置いて寝ている。

「お姉ちゃん、おきてよお姉ちゃん。せまくなっちゃうから、じぶんのところでねてよ」

悠斗が困った顔をして星奈の体をゆする。すると星奈は目を開け、悠斗のほうに体を向けた。

「いいじゃない、今日は悠斗と一緒に寝たい気分なのよ」

星奈はせいっぱい元気良くふるまおうとするが、声がかたところどころ震えてしまっている。

「……そんなにさっきのテレビがこわかったの？」

悠斗はあきれたように聞いた。今年の四月に別々の部屋で寝るようになってから、このようなことが二、三回あったため、だいたい察しがついた。

「ふん！」

星奈は何も返す言葉がないらしく、そっぽを向いてしまった。悠斗はお姉ちゃんに背を向け、再び横になった。

ふと、お姉ちゃんのほうからいい香りがしてくるのに気がついた。悠斗はお姉ちゃんのほうを向く。

「ねえ、お姉ちゃんからいいにおいがするね」

星奈がこちらに体を向けた。

「そう？ たぶんシャンプーのおいだと思うよ」

星奈はそう言って、悠斗の頭のとっぺんに鼻をくつつけた。

「ほら、悠斗もうちのシャンプーのおいがする」

星奈は笑顔で言った。悠斗はくすぐったそうにして背を向けた。

それを見たお姉ちゃんは、安心きったように悠斗のほうを向きながら目を閉じた。

二分くらいたった時、突然『カタン』という音が悠斗の部屋に響いた。

「キヤッ」

星奈が悲鳴を上げ、悠斗の背中に抱きついた。うとうとしていた

悠斗は、お姉ちゃんに抱きつかれて一気に目が覚めた。

「お姉ちゃん、なにかあったの？」

「幽霊よ。今のは絶対幽霊よ」

星奈の歯がカタカタ鳴る音が聞こえてくる。

「え？ ゆうれい？」

悠斗はうれしそうに言って体を起こした。星奈も一緒に起きるが、悠斗にしがみついたままだ。

「幽霊いた？」

星奈が不安そうに、辺りを見回している悠斗に尋ねた。

「いや、いないみたい。お姉ちゃんの気のせいだよ」

悠斗は残念そうに言う。

その時、正面の本棚の前にぼんやりとなにかが浮かび上がるのが見えてきた。十秒くらいたった時には、それは人の形だということがはっきり分かるようになった。

「だれかいる……」

悠斗は緊張した声でつぶやいた。

「冗談はやめてよ！ 悠斗ひどい！」

星奈の悠斗を抱きしめる力が強くなった。

悠斗はお姉ちゃんを無視し、抱きつかれながらひざで立って部屋の電気をつけた。

一人の少年が、興味深そうにこちらをじっとみつめていた。

「うわあ！」

悠斗は、突然銃を突きつけられたようにびっくりし、ベットから落つこちた。悠斗に体重をかけていたお姉ちゃんも、一緒に尻もちをつく。

「きみたちは、オレのことが見えるのか？」

その少年は、目を大きく見開いて二人に尋ねた。

「……う、うん」

悠斗が、うなずきながら答える。

「そうか、そうか。やっと会えたか。いや、正直うれしいぜ。誰にも気づいてもらえなかったからな」

少年は、ポリポリと頭をかいいた。

悠斗は、その少年をよく見てみた。坊主頭で、ランニングシャツと短パンをはいている。年はお姉ちゃんと同じくらいだろうか。

「あ、あの……、きみはいつたいどこから入ってきたの？」

悠斗がそう訊くと、少年は驚いたような顔をした。

「……どこからって、壁をすり抜けてきたんだよ」

少年は当たり前のように言った。

「すり抜けてきたって、どういうこと？」

悠斗の言葉に、少年は訳がわからないというふうな顔をする。

「お前もしかして、『幽霊』が壁をすり抜けられることを知らないのか？」

悠斗は、口をあぐりと開けた。

「ほ、ほんもののゆうれいなの？」

「そりゃそうさ。こんな幽霊らしい幽霊はいないと思うぜ」

「で、でも……。足があるよ」

「幽霊が全員、足がないと思ってもらっちゃ困るな」

幽霊だと言った少年は、苦笑いした。

「ところで、お前のとなりで丸くなっているのは、お姉ちゃんかい？」

幽霊は、星奈を指差す。その言葉に、床に顔を突っ伏している星奈は、ビクツと反応した。

「ねえ、きみの名前はなんていうの？」

幽霊は、甘い声で星奈に尋ねた。

「……星奈」

星奈は、十秒ほど間をあけて答えた。

「へえ、星奈ちゃんっていうんだ。かわいい名前だね」

幽霊は、にっこり笑って言った。

かわいいと言われて、星奈は少し気持ちが落ち着き、恐る恐る顔を上げた。

「あなた、本当に幽霊なの……？」

「さっき言ったじゃん。本物の幽霊なんだよ」

幽霊は、めんどくさそうに答えた。

「でも、人間にしか見えない……」

たしかに、まったく体はすけていないし、プカプカ浮かんでもいない。むしろ色がはつきりしている。

「うーん、これはオレの想像なんだけど、人間と幽霊って相性があると思うんだ。きみたちはオレのことがはつきり見えるんだろ？」

だからきみたちとオレは、とても相性がいいんだよ」

幽霊は、言葉を慎重に選びながら語った。すると、悠斗が立ち上がり、ベットの上にこしを落とした。

「ねえ、ところできみはここに何しに来たの？」

悠斗が、目をキラキラさせて訊いた。幽霊と会話をしているだけでも、うれしいようだ。

「よくぞ聞いてくれた！ オレもそれを言いたかったんだ。……い

いかお前たちよく聞けよ。おれはなあ……お前たちと遊びたいんだ！」

幽霊は両手を横に広げて言った。あまりにも意外な告白に、二人は返す言葉が見つからない。

十五秒くらいたって、ようやく悠斗が口を開いた。

「ぼくらとあそびたいって？　どういうこと？」

幽霊はため息をついた。

「あのなあお前ら、人の話は一回で聞くもんだぜ。おれは、もう一度誰かと一緒に遊びたいんだ。……この体になって五十年くらいたつけど、まだ誰とも遊べてないんだよ。たいていの人間にはオレのことは見えないし、見えていても怖がって逃げ出しちまう。そんな時出会ったのが、お前たちだ。お前たちはオレの話をちゃんと来てくれるから、きつと遊んでくれると思うんだ。だから、……オレと遊んでくれないか？」

幽霊は一気にしゃべると、胸の前で腕を組んだ。

「……いいけど、なにしておそぶの？」

悠斗がぼそつと答えた。

「うーん、まだ決めてないんだけど、オレは……」

幽霊が考え始めた時、階段を誰かが上がってくる音が聞こえてきた。そのとたん、幽霊がすつと立ち上がった。

「悪い！　続きの話はまた明日な」

幽霊はそう言い残すと、窓に向かって走って行った。そして壁に激突するか、と思いきや、体が壁にすうつと溶けて消えてしまった。

「あれ？　あんたたち何してるの？」

パジャマ姿のママが、驚いた顔をして言った。

「なんで電気なんかつけてるのよ？　……やっぱりお姉ちゃんは、ここにいたか」

ママも、星奈の心は読めているようだ。

「あのね、ぼくたちゆうれいに会って、おはなししたんだよ」

悠斗が、うれしそうな顔をした。



「え、幽霊？ あんた夢でも見たんじゃないの？ ……とにかくもう遅いんだから、早く寝なさい」

ママは、まだ話し足りなさそうな悠斗と、ビクビクおびえている星奈をベットに寝かせ、一回辺りを見回すと、電気を消して悠斗の部屋を出て行った。

ママが階段を下りて行った後、悠斗はお姉ちゃんに尋ねた。

「さっきのゆうれいは、ほんものだったよね？」

「……うん」

お姉ちゃんはそう言つと、悠斗に背を向け、目をギュツと閉じた。

## 第四章 ゆう君誕生

「うん……」

本物の幽霊と突然出会い、しかも会話までしてしまった日の翌朝、星奈はうつすらと目を開けた。

その瞬間、太陽光線という名の矢が、星奈の目に突き刺さってきた。星奈は、

「うつ」

と声をあげ、おまわりさんに見つかってライトを照らされたドロボウのように、右手で目を覆った。

数羽のスズメの声が、窓の外から聞こえてくる。それはまるで、『おはよう！』とあいさつをしているようだ。

昨日閉めたカーテンは全開になっていて、朝から元気いっぱいに働いている太陽の光が、星奈の顔にギラギラと降りそそぐ。星奈の額に、汗がにじんできた。

一分くらいたって、目が明るさに慣れてきたころ、星奈はようやく目を覆っていた手をどけ、目を開けた。すると、ベットの横に誰かが立っているのに気づいた。逆光で輪郭しかわからない。

「誰……？」

星奈は寝ぼけた声でそういうと、首を少し左へひねった。

そこに立っていたのは、坊主頭の少年だった。星奈の顔を、興味深そうにじろじろとのぞきこんでいる。

「キヤー！」

星奈はめいっぱいのどを開いて叫ぶと、あわてたように悠斗が寝ている壁側へ転がる。そして悠斗の背中を押しつぶして、悠斗と壁の間に入りこんだ。

「ぐふっ」 夢の中で大好きなドーナツを腹いっぱい食べていた悠斗は、星奈お手製のロードローラーによって無理やり現実へ引き戻され、二、三秒の間息が止まった。

「なにするのさ、お姉ちゃん！」

悠斗は、いつの間にか自分と壁との間に挟まっているお姉ちゃんに、顔を向けた。すると星奈は震えた声で、

「幽霊、そこに幽霊が！」

と言い、目をギョツとつぶりながら向こう側を指差した。

悠斗はその指先をたどっていく。するとベッドのすぐ横で、坊主少年がニコニコ笑いながら右手を軽く振っていた。

お姉ちゃんに押しつぶされて不機嫌だった悠斗の顔が、たちまちぱあつと明るくなる。

「ああっ、ゆうれいだ！ 朝なのにゆうれいが出てる！ どうしてどうして？」

悠斗はそう言うつとベッドを這っていき、そのはしっこに座った。

「そりゃそうさ。朝になったからって消えるわけじゃないよ。見える人にはいつでも見えてるもんさ」

幽霊は、澄ました顔で答えた。悠斗はふーんと納得する。

「ところで、今日は何しに来たの？」

悠斗が、ワクワクと心を弾ませながら訊いた。幽霊がため息をつく。

「おいおい、昨日言っただろ？ オレと一緒に遊ぼうって約束したじゃねえか。お姉ちゃんと仲良くおねんねしたら、すっかり忘れちゃったのか？」

幽霊は、両手を右のほっぺたにくっつけて首をかたむけ、眠るポーズをとった。

「お、お姉ちゃんがかつてにぼくのベッドに入ってきたんだよ。別にいっしょにねたかったわけじゃないもん」

悠斗はほっぺたをふくらませる。すると幽霊はふんつと鼻を鳴らした。

「なに言っただ。お前気持ちよさそうに寝てただろ。お姉ちゃんと顔がくっつきそうになってたぞ」

幽霊は、少しうらやましそうだ。

「あ、あんたずっとここで見てたの？」

落ち着きを取り戻した星奈が、今度は怒った顔で幽霊をにらみつけた。

「そうさ。昨日の夜、きみたちのママが部屋を出て行って少したつてから、またここに帰ったんだよ。少し前までおびえてた星奈がすっかり寝てしまったのには、少しびっくりしたぜ」

「朝、あたしの顔を見てたのはどうして？」

星奈が、ひたいにしわをよせながら尋ねると、

「いやゝきみの寝てるときの顔がともかわいくてさ。ついつい見入っちゃったんだ」

と幽霊は頭をかきながら恥ずかしそうに言い、横に視線をそらした。

幽霊からそんな言葉が飛び出してくるとは思わなかった星奈は、顔を赤らめ、がばつとベッドからはね起きた。

「悠斗！ さつさと起きて着替えなさい！」

星奈はそう言うつとベッドからジャンプし、部屋を飛び出していった。

「もうおきてるのに」

悠斗は不満そうに言う。

幽霊はドアのほうを見て、クックつと笑っていた。

台所にあるレンジがブーンと音を立てている。悠斗はレンジの前にしゃがみ込んで、じつとその中で回っているお皿をながめていた。

「悠斗、あんたはお茶わんにごはんを盛っておいて」

みそ汁を温めながら、星奈が言った。

「うん、わかった。しゃもじはどこ？」

悠斗が、立ち上がって星奈を振り向いて答えると、星奈は台所の一番上の引き出しからしゃもじを取り出し、こっちを見ずに悠斗へ投げた。

悠斗はそれをきれいにキャッチし、レンジとは反対側にある炊飯器のところへペタペタと音を立てながら歩く。

炊飯器からは、モクモクと水蒸気が立ちのぼっている。悠斗は、近くに置いてある丸イスを持ってきてその上に乗る、炊飯器のふたを開けた。そのとたん、ものすごい熱気が悠斗の顔を包んだ。

「あっちー！」

悠斗は、あわてて丸イスから飛び降りた。

「バカねー、スイッチ切らないと熱いに決まってるじゃない」

星奈がこしに手を当て、首だけこっちに向けながらあきれたように言った。

悠斗は、少しおねえちゃんをにらんだが、何も言わずに炊飯器に手を伸ばし、『切』のボタンを押した。

ごはんを盛った二つのお茶わんをお盆に乗せ、リビングへ持っていかうとすると、

「まって、これも持っていったよ」

と星奈がみそ汁を二つ、ごはんの横に置いた。

お盆が少し重くなり、悠斗は少しふらつく。そのままテーブルへ運んでいくと、幽霊が悠斗のほうを向いてイスに座っているのが見えた。

「おつ、落つことすなよ？ オレが手伝ってやろうか？」

幽霊がニヤニヤ笑いながら尋ねた。

「どうせさわれないくせにー！」

悠斗が顔をひきつらせながら答える。幽霊がゲラゲラ笑い、

「そうか、そうだよなあ！ 手伝ってやりたいけど、それじゃ仕方ないよなあ」

とバカにしたような顔で、悠斗を見る。

悠斗は、慎重にお盆をテーブルへ置き、ご飯とみそ汁を対になるように並べた。

お盆に、少しみそ汁がこぼれている。

『チン』

レンジからおなじみの音が聞こえた。その中から星奈が、ラップがかけられているお皿を二つ取り出す。

熱い熱いと言いながら星奈は、早足でやってきてテーブルにお皿を置いた。ラップを外すと、隣でティッシュを使ってお皿をぬぐっている悠斗の耳たぶを二つ、両手の親指と人差し指でつまんだ。

「あつつい！ なにすんのさお姉ちゃん！」

悠斗が首をブンブン振って星奈の手から逃れると、星奈は

「あははは！」

と笑い、外したラップをゴミ箱へ捨てにいった。

「きみたちは、いつも朝はこんな調子なのか？」

幽霊は二人を交互に見ながら言った。

「そうだよ。お姉ちゃんがいつもぼくをからかうんだ」

「へえ うらやましいもんだな」

幽霊が悲しそうな顔をしてつぶやく。

「なにがさ。こんなことされてどこがいいの？」

悠斗が、自分の耳たぶをつまむ。

幽霊が口を開こうとした時、星奈がすべり込むようにして幽霊の向かい側のイスに座った。

「さあ、さつさと食べちゃうわよ」

星奈は箸をつかみ、お茶碗に手を伸ばす。

「まってよ、お姉ちゃん」

悠斗が、あわてて幽霊のとなりにすわる。

「ちゃんと『いただきます』を言わないとダメなんだよ」

悠斗は手を胸の前で合わせながら言った。

「そうだな、ちゃんとあいさつしないといけないもんね。お姉ちゃんなのにそれを忘れちゃマズイよね」

幽霊が、口の端を曲げて笑う。

「『なーなー』ってうるさいわよ！ 言えはいいいんでしょ、言えはい！ ところで、なんであんたもそこに座ってんのよ」

星奈は幽霊を指差す。

「いいじゃないお姉ちゃん。うれしいんだから、おかずをとられることはないよ」

「そんなことを言ってるんじゃないわよ。幽霊が前にすわってたら、落ち着いて食べられないでしょ」

「おいおい、そんなひどいこと言うなよ。オレたちはもう友達だろ？」

星奈のひたいにしわが寄った。

「え、どういうこと？ あたしたちいつから友達なんかになったのよ」

「やったー！ ゆうれいとお友だちになったー」

悠斗は両手を上げて喜んでいる。

「これから一緒に遊ぶんだから、友達じゃないか。それともオレが怖くて一緒に遊べないのか？」

幽霊が不安そうに尋ねる。

「昼間に幽霊を見たって怖くないわよ。暗い所で、突然目の前に現れるのがイヤなだけ。っていうかあんた、普通に見たら人間にしか見えないわ。何かにさわるうとしてさわれないのを見て、気づかされるくらいよ」

「そうか、それなら安心だ」

幽霊が、胸をなでおろした。

「お姉ちゃん、早く食べないとみそ汁さめちゃうよ」

悠斗が口をはさんだ。

「あ、そうね。もうおなかペコペコよ」

星奈が、幽霊をちらつと見る。そして両手を胸の前で合わせ、

「いただきますー！」

と二人で声を合わせて言い、二人はそろってごはんから食べ始めた。

「ねえ悠斗、そこにあるしょうゆをちょうだい」

星奈が、悠斗の近くに置いてある小瓶を指差す。

「ん」

悠斗が、口をもぐもぐさせながら手渡した。

「サンキュー」

星奈はお皿に乗っている目玉焼きの真ん中に、しょうゆをドバドバとかける。お日さまの光でキラキラ光っていた白身が、しょうゆ色でくすんでしまった。

それを見た幽霊は、うつと声を上げた。

「おまえさあ、いくらなんでもかけすぎじゃないか？　せつかくのタマゴの味が薄れるだろ」

「うるさいわねえ、いいじゃない。あたしはしょっぱいほうが好きなのよ」

幽霊はあきれて、悠斗のほうを見る。こいつは、お姉ちゃんのよくなマネはしないだろう。

悠斗も、目玉焼きを味付けしていた。だがそれはしょうゆではなく、お塩だった。ラベルには『国内産』と書かれている。

悠斗は、塩をかけすぎないようにするため一回手のひらに取ってから、均等に降りかかるようにしている。

姉と弟でこの差は何だろう。この姉、今は華奢な体つきをしているが、三十年くらいしたらきっと血がドロドロになっているに違いない。

「ところで、」

食事を半分ほど進めた星奈は、突然箸をおいた。

「あんたはいつたい何者？　何しに来たの？　そもそもなんであたしたちの家に来たわけ？」

星奈は、マシガンのごとく質問をぶつけた。

「いっぺんに訊かれても困るな」。　わかったよ。そういえばオレのことは何にも言っただけだったもんな」

そこで幽霊は、せきばらいを一つした。

「オレは幽霊になってから五十年くらい全国を回って、一緒に遊んでくれる人を探してたんだ」

悠斗が『五十年も？』と驚きの声を上げた。



「そうさ。オレのことが見える人はたまにいたんだけど、とっても怖がって遊ぶどころじゃなかったな。そうそう、お被いがしてあつて入れなかった家もあったぜ」

そこまで話した時、星奈が口をはさんだ。

「どうしてそんなに遊びたいのよ？」

すると幽霊は、少し悲しそうな顔をした。

「オレ、友達が全然作れなくて、いつも一人で遊んでたんだ。川でおぼれて死んだ時も一人だったから、せめて誰かと楽しく遊んでから成仏したかったのさ」

幽霊のその言葉に、悠斗は感動して立ち上がった。

「わかった！ いっしょにあそぼう。ぼくたちともだちだよ」

「本当か？ ありがとう！ きみは心の友だ！」

幽霊は悠斗に抱きつこうとするが、当然のようにお互い触れることはできない。

「そのセリフ、どこかで聞いたことあるんだけど？」

悠斗が不思議そうな表情をした。

「ああ、先週やってたアニメで聞いた言葉だからな」

幽霊は、星奈のほうを向いた。

「星奈も、遊んでくれるのか？」

星奈はすこし考えた。

「ま、まあ、悠斗をあんたと二人つきりにしておくわけにはいいかな、弟の面倒をみるのはあたしの仕事だし。ついでに遊んであげるわよ」

「ねえねえ、何してあそぶの？」

悠斗がテーブルに身を乗り出した。

「そうねえ」

星奈はうーんとうなりながら腕を組んだ。幽霊と遊べることなんて考え付かない。サッカーや野球はできなさそうだ。

「かくれんぼだ！ かくれんぼにしよう！」

幽霊は興奮しながら提案する。

「そう、それがいいわ！ それにしましょう」

「かくれんぼなら、ぼくとくいだよ」

悠斗が胸を張って言った。

「へえ、それは楽しみだなあ」

「さあ、そうときまったら早く食べちゃいましょう」

星奈は再び箸を手にとった。悠斗もごはんを口にかきこむ。

「あーさ きみの名前って なんていうの？」

リスのように口の中に食べ物を詰め込んだ悠斗が訊いた。

「うーん、実はオレ、幽霊になってから記憶がどんどんぬけてきてさ。じぶんの名前も思い出せないんだ」

幽霊が恥ずかしそうに答える。

「えー、自分の名前なんて一番忘れないものでしょ」

星奈はあきれたような声を出す。幽霊は苦笑いすると、だまってしまった。

二十秒くらいたった時、

「きまった！」

と悠斗が叫んだ。

「何が決まったのよ？」

星奈はげんなり顔をする。

「ゆうれいのなまえさ」

悠斗は幽霊のほうへ向き、犯人を見つけた探偵のように指差した。

「ゆう君！ きみの名前はゆう君だ！」

悠斗は笑顔で言い放つと、自分のイスへ座った。

「なんで？ どうしてゆう君なのよ」

「もしかして幽霊だから『ゆう君』なのか？」

「そう！ あたりだよ」

悠斗は涼しげな顔をしている。

「まったく、あんたはどういうセンスしてるのよ」

星奈は不満そうだが幽霊、基ゆう君は、

「オーケーだよ。いい名前だ。友達に名前を付けてもらうなんて

「とっても嬉しいよ」

と満足していて、ゆう君のひとみが、うるうるしている。

「あれ、幽霊なのに泣いてるの？ 鬼の目にも涙ってやつ？」

星奈の、その言葉の使いどころはどこか間違っているが、それに気づく者はいない。

「ち、ちがうぞ！ これは その 目から汗が出てるんだ！

夏は暑いんだから汗をかくにきまつてるだろ！」

ゆう君は、その場をにげるようにして出て行き、二階へ上がっていった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0624y/>

---

ばくのお姉ちゃん

2011年11月12日03時22分発行